

三津谷鷹介

表紙イラスト/しろすず

二次元ぷち文庫

2D PETIT POCKET NOVELS

試し読み版

マリオネット

電子淫夢の

操り人形

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『電子淫夢の操り人形』
マリオネット
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



マ リ オ ネ ッ ト
電子淫夢の操り人形

三津谷鷹介
表紙イラスト/しろすず

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

いりやま なみ

入谷真那美

お嬢様女子大に通う女子大生。Eカップバストでバージン。変化のない現実から刺激を求め、ネット世界では「ナミ」というアバターを用いバーチャルセックスを楽しんでいる。

その部屋は、奇妙な場所だった。

広さは、それほどではない。一般的な一戸建てのリビングルームくらいだろうか。

室内の調度の類は定かではなかった。そのうちのほとんどが闇に沈んでいるからだ。部屋の広さも、四方の壁の低い位置に取り付けられているとおぼしき間接照明のわずかな明かりでようやくよくそれと知れる程度で、それすらなければ、おそらくそこが部屋かどうかも判別できないだろう。

長い間中にいると自分と外界の境界すら見失ってしまいそうな、その闇にはそんな非人間的なうすら寒さが漂っているようだった。

その水槽のような空間の中で、しかしそこだけまるで絵を詰めこんだようにくつきりと浮き上がって見えているものがあつた。

「あんっ！ あああんっ！ はひいいっ!! ああっ、そこ……そこおっ！ もっと突いて、突き上げてえっ！」

闇の無機的な匂いとは対極の、生臭く淫らがましい喘ぎ声と息づかい。

一組の男女が、部屋の中央で全裸で絡み合っていた。

上になっているのは女性の方、それもまだ少女といつてもいい年頃の若い女だ。

長く伸ばした髪は、闇の中でひとときわ目に鮮やかな金髪だった。しつとりと汗を含み、高く掠れる鳴き声とともに細い顎をのけぞらせる度に大きく左右に振り乱されて、まるで

光の粒子を撒き散らしているようだ。

その黄金の絹糸をまとわりつかせる小さな顔は、陶器のように滑らかな肌に包まれて、精緻な工芸品にも似た美しさを見せていた。

アーモンド型の、目尻がやや釣り上がった勝ち気そうな瞳は深く透き通るエメラルドグリーン。我を忘れるほどの悦楽に涙を浮かべたその様子は、南海の神秘的な珊瑚礁を思わせる。

鼻はつんと上を向き、白い歯をのぞかせる小さな口からは熱い吐息とともにちろちろとピンク色の舌尖が躍って瑞々しい唇を唾液でぬめぬめとてからせていた。

今は一糸まとわぬ姿で胎内を男の逞しい肉棒で満たされる悦びにすっかり蕩けきってしまっているが、本来ならば豪華なドレスを着て澄ましているのが似合わないような、■いながらも高貴さすら感じさせる整った容貌の美少女だった。

その美貌と子鹿のように細くしなやかな肢体は、全身が浅い褐色に日焼けしている。突き上げられる度にふるふる上下に震える、大人の掌ならすっぽりと覆えてしまいそうな控えめな乳房と、その外見とは裏腹に自分から巧みに男に擦りつけて快感を貪る薄い腰だけがピキニスタイルの形に白く焼け残っているのがいつそう年齢不相応の淫猥さを強調しているようだった。

「くふうん……っ！ あんっ、もつとお！ おち○ぼ、大きくしてえっ！ もつと強く、

あたしのおま○こ、ズボズボしてよおっ!

「お、おいつ、ナミちゃん……、ま、また、締まる……っ!」

塗り潰されたような闇の中で、一つになって肌をこすり合わせる二人の肢体だけが、まるでスポットライトでも当てられているようににはつきり見えている。彼女たちが乗っているのは大きなベッドのようだったが、すぐ下に敷いたシーツすら闇に霞んでいるというのに、ナミと呼ばれた少女の身体の陰になっているはずの二人の結合部は溢れ出した淫汁の白い泡の一粒一粒までもが鮮明だ。

その不自然さを気にかける様子もなく、ナミは小さな手で自分のささやかな胸の膨らみを揉みしだきながら、男の腰の上で丸いお尻をくいくいつとしゃくった。薄い恥毛の下でぷっくりした肉の丘がはしたなく割れ目の幅を広げ、突き立てられた肉柱をより奥深くまで引き込もうと桃色の肉襞をはみ出させながらひくひく震える。

細い太股は男にまたがって大きく広げられているのに、少女の膣肉は飲み込んだ剛直をきつく締め上げて放さないようだった。

「ひいうっ! くるっ! きちやううっ!! おま○こ、ゴリゴリこすられて、あっ……もう……もうっ!」

切れ切りに絶頂が近いことを告げるナミの上半身が、それまでにも増して淫らにくねる。激しい動きで肉竿が外れかかってしまい、男の腹に両手をつけて身体を支え直すと、引き

締まった下腹がびくつと震えた。

よく見ると、白と褐色の境界に当たるその部分には、もう一色、赤い模様のようなものがべたりと張り付いている。それは、乱暴に書きなぐられた文字だった。

『中出し大好きビッチマ○コ』『淫乱売女にいつでもハメて!』

過激な文言が、汗に濡れて肌と一緒に左右によじれている。

その下で、浅黒いペニスを啜え込んだ幼い淫裂が物欲しげにうごめいた。胎内では未成熟の薄い膈壁が肉柱に絡みついて、熱い幹でするりと擦られる快感を存分に貪る。

「んふうっ……イク……イクううう——っ!!」

「お、俺も……もう……出すぞっ! 中にいつ!」

小さな胸の膨らみがほとんど形を失ってしまうほどに細い身体をのけぞらせ、真つ暗い天井を見上げながら、ナミは絶頂の喘ぎを高く迸らせた。

同時に、雌蜜でべとべとになったピンク色の肉襞がきゅつきゅつと引きつれるように収縮する。男の浮いた腰が、がくがく揺れた。

ぶりゅっ! どぶどぶううっ!!

「……!?!」

膈内に広がる異様な感触に、イッたまま、裸身をひくつかせたまま少女は大きく目を見開いた。固く張りつめた先端を押し当てられた子宮口で感じる射精が、まるで消火栓から

噴き出す水のように並外れた量と勢いだったからだ。

「な……なによこれえっ!？」

びゅるっ！ ぶちゅっ、ぐちゅっ、

膣と子宮がぱんぱんになるほど注ぎ込み、それでもなお放出される白濁の熱い粘液は泡立ちながら肉棒と肉褻の隙間からどろりと外に溢れ出して二人の間に染み込んでいく。

しばしの後、エクスタシーが収まった時には、ナミはまるで精液溜まりの上に座り込んでいるような気持ち悪さを感じていた。

「……どうだい、ナミちゃん？ 俺、凄かっただろ？」

細い眉をひそめながら、ぬるりと秘裂の谷間から萎えた肉塊を抜き出す少女に、横たわったままの男が自慢げに語りかけてきた。

「君もあれだけ感じてたんだし、俺たちって身体の相性……」

「やめてよ。冗談にしてもつままないわ」

しかしナミは、不機嫌にその言葉を遮ると、さっさと彼に背を向けてしまった。

「エッチはただ腰振るだけの猿レベルだし、射精の設定なんて、それ非公式のパッチ当ててるんでしょ？ そんなのに頼ってる男となんて、二度とゴメンよ」

ナミは肉の薄い下腹を見下ろす。膣口から、とろとろと精液が垂れ続けているのが不快だった。

「それに、こんなタトゥーまで勝手に貼り付けて」

小さな手が赤い文字の上を一撫ですると、淡い金色の恥毛とともに少女の秘部を彩っていた卑猥なメッセージは跡形もなく消え去った。

「お、おい、そんな……」

慌てたように身体を起こして声をかけてくる男はもはや一顧だにせず、ナミは暗闇の中でベッドから床に降り立つ。するとその瞬間にはもう、滑らかな肌を汚していた汗と淫液はきれいに消え去り、スレンダーな肢体には短い白のチューブトップとへそ下までを大胆に露出させたきわどいカットオフデニムを身に着けた姿になっていた。

「じゃあね。あんたのアレだけは、太くてちよつといい具合だったわ」

さつきまで肉悦に泣いてよがっていた金髪的美貌には、今は皮肉な笑みが浮かんでいる。端正だが、同時に気の強さも感じさせる吊り上がり気味の目元で後ろに見下すような一瞥をくれると、少女はさつきと歩き出した。暗闇の中に扉が現れて、ナミはそのまま外に出る。部屋の中には、素っ裸で座り込んだ男だけが取り残された。

『扉』から出たナミは、同じような『扉』がいくつも並んだ『廊下』を通過して『広間』に戻った。

周囲の壁が見えないほどに広いそこは、何人もの人影があちこちに固まって会話に興じ

るざわめきに満ちていた。ほとんどは普通の人間の姿をしているが、中には天使のように背中から羽根を生やした男とか、常識外れに巨大なバスタの女なども混じっている。旧式のロボットのように、金属の直方体を組み合わせて人の形にした姿まで見受けられた。今、ナミがいるのは、現実の三次元空間にある世界ではない。その世界中に張り巡らされた電子ネットワークの中に築かれた仮想空間だ。現実世界の人間は、特殊なデバイスを装着することでアバター（化身）となってこの世界に入り込むことができるのだ。

十年ほど前から加速度的に発展した仮想現実技術は、今日では脳に直接感覚器官と同レベルの信号を送り込めるようになっていた。電子的に構築された世界で、自在にデザインできるアバターの姿を借りて、現実には不可能な体験を楽しんだり、物理的な距離に縛られない交友を広げたりというのは、現在ではごく一般的なレジャーになっていく。

表立って語られることはないが、さっきまでナミが楽しんでいたようなアバター同士のバーチャルセックスも、そういった仮想世界での遊びの一つだった。

「ナミ」というのは、もちろんこの仮想現実コミュニティサイトだけの名前であり、姿にすぎない。ここでの知り合いは幾人もいるが、現実世界の彼女の素性を知っているのは一人もいない。もちろんナミの方も、彼らのリアルの名前など知りはしなかった。そう、セックスの相手の男が、現実でも男かどうかすら定かではないのだ。

仮想世界だから、その中で使うアバターにはどんな姿でもなれるのだが、五感全てに擬

似感覺情報が与えられ、まさに「もう一つの現実」を構築するこの世界では、あまりリアルと、つまり人型とかけ離れた姿を取るとともに操作するのも難しい。いきおい、個性を出そうとする連中は、髪や瞳の色だとか服装などに凝ることになるのだった。

ナミが先ほど口にしたのもそういったアクセサリの一つで、通称こそ『タトウ』と呼ばれているが、実際はアバターの肌には貼り付けるテクスチャにすぎないから貼るのも消すのも自由自在だ。ネットワーク住民の間ではメジャーなファッションの一つだった。

「よおナミちゃん。相変わらずいいケツしてんなー。俺と一発、今からどうよ？」
「ナミ、次来る時は胸でかくしとけって言ったろ？ お前に挟ませてえんだよ」

広間にナミが現れると、男たち——それもあまり素性のよくなさそうな連中から、次々に彼女に声がかけられた。大胆に肌を露出させた少女の瑞々しい小麦色の肢体に絡みつくような視線が向けられ、早くも股間をこれ見よがしに膨らませる男までいる始末だ。

「……ゴメン、今日はもう落ちるの。また今度遊びましょ」

しかしナミは、そんな男たちの下卑たアプローチに薄い笑みを浮かべつつ、慣れた態度であしらいながら間をすり抜けていく。不満そうな声を尻目に、少女の身体はすぐにその世界からかき消えた。

(……………)

暗い部屋の中でベッドに仰向けに横たわった入谷真那美は、生身の肉体の四肢に意識を巡らせつつ、目を閉じたたままゆつくりと息を吐き出した。

瞼の裏に小さな光が明滅し、天地の感覚がいささか怪しくなっている。俗に言うログアウト酔いという奴だ。

室内には空調が効いているが、彼女の全身は汗まみれになっていた。アバターの汗はすぐに消すことはできても、リアルの方はそうはいかない。ノーブラのタンクトップが肌に張り付く感覚が不快だった。

「……シャワー……。浴びなきゃ……」

気だるげに呟いて、彼女は頭をすっぽりと覆うヘルメットのような仮想現実デバイスを外して上体を起こす。その拍子に、豊かなバストがゆさりと揺れた。

脱衣場の洗面台にしつらえられた鏡の前で、真那美は自分の顔を、身体を見返してみる。我ながら、地味な顔立ちをしていると思う。

これまで染めたことも色を抜いたこともない黒髪は、大人しめのセミショート。目はぱっちりしていて可愛らしいと子供の頃はよく言われたものだが、あいにく今は眼鏡をかけてしまっている。それ以外の目鼻立ちは……取り立てて不満がある訳ではないが、かといって人並みより上と言えるほどではないと自分では思っていた。あまり外を出歩くのが好

きな性質ではないので、肌が白いのが多少は自慢できるところだろうか。

べたつく汗に苦勞しながら、タンクトップを脱ぎ捨てる。

その拍子に、露わになった二つの乳房がまた、ぶるんと揺れた。身長は平均程度、体格はむしろ華奢なくらいなのだが、この女の子のシンボルだけはむっちりと大きく豊かに、彼女の胸でその圧倒的なボリュームを誇示しているのだった。

小ぶりのスイカを二つ並べたほどの量感がありながらも、若く瑞々しい肌に引き締められて、その母性の象徴は弾むような張りをもつて前に突き出している。もともと色白のせいか、ぽっちり咲いた乳輪はきれいな桜色だった。

ブラは一応Eカップを選んでいて、人にサイズを聞かれてもそう答えるが、アンダーが細いので本当はFでもいいくらいだった。

女友達は冗談とやつかみ混じりにうらやましいと言ってくれるが、実は真那美自身は豊かなバストを嬉しいと思ったことなど一度もなかった。むしろコンプレックスの種だったと言ってもいい。中学校に上がる前から膨らみだしたこの胸は、自分の意思とは関係無しに男たちのいやらしい視線を集めてしまうからだった。

それが嫌で、彼女はなんとなく男性に苦手意識を持ったまま成長していた。幾度か告白されたこともあるのだが、皆自分の身体が目当てのような気がして断ってしまった。

結果、大学に入った今に至るまで、男と付き合ったことは一度もない。もちろんバージ

ンのままだ。

そんな自分が、仮想空間だとしてあんなに奔放に振舞い、行きずりの男たちと肌を重ねることができるのか、自分自身でも不思議でならなかった。

(ナミのアバターを、リアルと全然違う姿にしたせいなのか。本当に、この私とはまるで別人みたい。どっちも同じ、私の意識なのにね)

ショーツを脱ぐと、べたつく感触とともに恥毛が下腹に張り付いているのが見えた。仮想空間で受け取った刺激に昂った身体が秘裂から蜜を溢れさせ、その辺りを汚しているのだった。

(私、現実ではまだキスもしたことないのに……。感覚だけは、エッチの気持ちよさを覚えてちやつてる。ううん、濡れちやつてる……。いいのかな、こんなので……)

汗をかいたままの裸身が冷えて、ぞくつと震えが来た。

バーチャルセックスの後にはいつも感じる漠然とした自己嫌悪を振り払うように大きくかぶりを振ると、真那美はバスルームの中に入っていった。

数日後、その日の講義を受け終えた真那美が学食で遅めのランチを取っていると、一人の女子学生が現れた。語学で同じクラスを選択している友人だった。

「あ、こんなとこで一人でご飯食べてる。ねえ真那美、メッセ見てないの?」

「……来たわよ」

目的の部屋に招き入れられると、真那美はそこに集まった男たちをぐるりと見回して言った。普段のナミと同様、遊び慣れた強気な物言いだったが、待ち受けていた彼らの反応は仮想世界とまったく違っていた。

「おほおっ、かわいいじゃねえか！ 大当たり！」

「ヒューッ、おっばいでけえっ！」

口々に野卑な歓声を上げながら、真那美の全身を上から下まで舐めるような視線でじろと眺め回す。

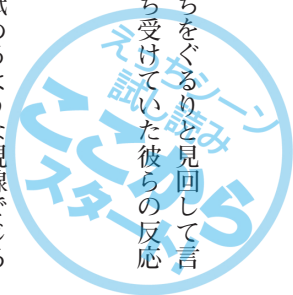
（そうやって言われるのがイヤだから、ナミは胸のサイズを控えめに設定したのに）

思わず両腕でバストを抱えるように隠しながら、彼女は思った。

仮想世界にログインする時は、当然外に出ることなどは考えていないしバーチャルセックスで汗もかくので、真那美は終わった後すぐにシャワーを浴びられるような格好をしている。今日も、無地のTシャツとハーフパンツというごく普通の部屋着のままだった。

しかし、ノーブラの胸はちよつと動く度にゆさゆさ揺れる彼女の巨乳の形を隠すことなく映し出してしまおうし、半袖と短い裾から伸びるむっちりとした白い腕や太股は男たちの目を否応なしに惹き付ける。

よそ行きでない「普通っぽさ」、そして同時にその中から隠しきれずに匂い立つ、成熟



した女の無自覚なセックスアピールという相反する要素が、これからこの女性を汚し、弄んでやろうという男たちの獣欲を強く煽るのだった。

「まあ、そんな顔してねえで、こっち来いよ」

胸の前で組んだ手を男の一人が取って、強引に自分たちの方に引き寄せる。幻惑に捕らわれたままの女子大生は、よろよろと雄臭い輪の中に倒れ込んでしまった。

「なあ真那美ちゃん、真那美ちゃんは、彼氏とかいるのかな？」

「……いないわよ」

目の前で彼女を見下ろした男が、にやにやしながら問いかける。

「そうだよな、お嬢様女子大生だもんなあ。ひよつとして、バージンか？」

「だ、だったら、なんだって言うのよ」

周囲の男たちからまた奇声上がる。目の前の男は、涎すら垂らしそうな獣欲に満ちた顔でズボンを脱ぎ捨てた。

「……別に、大したことじゃねえ。じゃあ、とりあえずしゃぶってくれよ。『いつもみたい』にな」

「……………」

すえたような悪臭を放つ赤黒い雄槍が目の前で脈打っている。ナミが仮想世界で見る男のペニスとはまったく違う、これまで先端から迸らせた精液や尿の臭いが染み込んでいる

ような本能的なおぞましさを感じさせる肉塊だった。

(う……臭い……。気持ち、わるい……)

その形、その臭いに今まで感じたことのない嫌悪感を覚えながら、それでも真那美はいつもナミとして男たちにサービスしてやるように、股間の前に膝立ちになって竿と寧丸に白い手を添えた。

桃色の舌を小さく突き出すと、太い血管の浮きだした裏筋をちろりと舐め上げる。そのまま、堅く張りつめた亀頭をぺろぺろ舐め回すと、薄くりップを塗っただけの瑞々しい唇でぱくりとくわえ込んだ。

「おほおっ……お嬢様が、俺のちんぽに初フェラっ……たまんねえっ！」

この人は何を言ってるんだろう、と真那美は思った。おしゃぶりなんて、いつもしてあげてるじゃない。それにしても——臭いし苦い。いつも、こんなに吐きそうになるほどの味が口の中に広がったっけ？

疑問を感じながらも、じゅぽっ、じゅぽっ、と音をさせながらすぼめた唇で極太の肉莖を奥まで飲み込もうとする。ナミの小さな口で、顎が外れそうになりながらいっぱいに剛直を頬張ってあげると、男たちは大抵鼻息を荒くして喜ぶのだった。

「へへっ、うめえ、うめえよ真那美ちゃん！ もう出ちまいそうだっ……！ せっかくだから、そのお利口そうな眼鏡にぶっかけさせてもらうぜ！」

……眼鏡？ ナミが？

思った瞬間、男の両手が真奈美の黒髪をかき分けて頭を左右から鷲掴みにした。そのまま、先端で喉の奥まで突き通すような勢いで激しく前後させる。とっさのことに何も反応できず、真奈美は唇と舌と喉までも膾肉のようにペニスをしごく道具に使われるままになつていた。

「……うぶええっ！」

「……うっ！ 出るっ!!」

涙をこぼれさせながらとうとう真奈美がえづくのと、男が最大まで膨れ上がった肉柱をずるりと口から抜き出して呻くのが同時だった。

ビュルッ！ ブビュウウウツツツ!!

「きゃあっ!!」

真奈美の唇から外れた瞬間、勢いよく跳ね上がった剛直は鈴口からホースのように大量の熱濁をぶちまけて、男の予告通り彼女の眼鏡にびちゃりと張り付かせた。こつてりとした濃厚な蛋白質の固まりは垂れ落ちもせず、肌や黒髪に留まり、派手さはなくとも聡明さを感じさせる女子大生の端正な容貌を無惨なまでに陵辱していた。

「けほっ、こほっ……。うえ、ぶえっ……」

真奈美は咳き込んだ。これまで仮想世界でも、いや、仮想世界だからこそ、現実ではで

きかないようなアブノーマルな行為に走る男は少なくないし、ナミもそういったプレイに付き合わされたこともある。

（でも……今日のこの人たちは、そういうのとも違う。すごく興奮してるせいかしら。せ、精液の臭いも、まるで鼻を突き刺すように濃くて、かかったところは熱くて……。これから私、これをあそこの中に出されちゃうの？　なんか、少し怖い……）

「おいおい、今からそんなんでどうすんだよ。パーティーはこれからが本番だろうが」
真那美の顔にぶっつけた男に変わって、痩せぎすで目つきの暗い男が涙ぐんだ彼女の前に立ちはだかる。むき出しになったその男の両肩には、どこかで見たことのあるような黒いタトゥーが彫り込まれていた。

「脱げよ」

ザーメンで顔を汚された真那美の前に立った黒いタトゥーの男は、先ほどまでの男とは違って無表情のまま短く言い放った。

「……な、なによ？　これから楽しもうっていうのに、そんな言い方……」

「いいから、脱げ」

有無を言わせぬその勢いに押されて、座り込んだ思わず真那美は口をつぐんでしまった。見た目は■いが、強気と毒舌でアングラサイトの不良住民たちとも対等に渡り合ってきた

ナミにそんな口の聞き方をする男は、これまでいなかっただ。

「分かったわよ。脱げばいいんでしょ……」

それでも虚勢は保ったままで、真那美は部屋着にしているTシャツを脱ぎ捨てた。たくし上げた裾が乳房を越えようと、真つ白なEカップバストがぶるんつ！ と震えながら獣欲に濁った男たちの視線のただ中に晒される。柔らかさと弾力を併せ持った若々しい豊丘は、下着に支えられていなくてもそのふくらとした丸みを崩さなかつた。

シャツを脱いでしまうと、もう彼女が身に着けているのは同じような無地アースカラーのハーフパンツだけだ。色気はあまり感じないが、それだけに日常生活の中で無理やり上着を剥ぎ取られたような、そんな倒錯的な雰囲気が漂うセミヌードを真那美は晒すことになつていた。

「うひょおっ！ ノーブラかよっ！」

「パイズリさせてええっ！」

部屋を揺るがすほどに、巨乳を揶揄する下品な大声が飛び交う。

緊張と気恥ずかしさできめの細かい肌にはわずかに鳥肌が立ち、土台の大きさの割には慎ましやかな乳輪は淡い桃色に染まっていた。その中心で、本来ならば小さく突き出してはいるはずの突起の姿が見えない。実は真那美は両胸とも陥没乳首で、それも自分のバストにコンプレックスを持つている理由の一つなのだ。

「ふん、取り澄ましたツラに似合わず下品なオツパイだなあ。……次は、下もだ」

タトゥーの男に促されて、真那美はおずおずと立ち上がるとハーフパンツに手をかけた。『真那美』ならば脅されたところで絶対にできないような行為——しかし、今の彼女は『ナミ』だった。

男たちの興奮を煽るように、自分もこれからの行為への期待を高めるように艶めかしく服を脱いでいくような手管は身に着いている。今日のプレイに漠然とした違和感を感じていながらも、裸身を晒すこと自体には抵抗はなかった。

（あら？ でも今日は、ちよつと地味だったかしら）

普段のナミは、恥毛や肉裂が透けて見えるようなレースの、それもローライズショーツがお気に入りののだが、今穿いているのはお尻を全部覆ってしまうような白無地のコットンショーツだった。今時、高校生でも穿かないような大人しすぎるそれを他人に見られるのが恥ずかしくて、真那美はお尻を突き出すのも構わずそそくさとそれを脚の間から外してしまった。

「ぬ、脱いだわよ」

これまで一度も他人に許したことのないリアルのものとも知らず、真那美は男たちにその初々しい素肌を余すところなく見せつける。

子供の頃からインドア派だった彼女は、体つきはどちらかというと華奢な方だった。そ

れでも、圧倒的に男の目を引く二つのバストだけでなく、腰も両足も柔らかい丸みを帯びてふるふると震え、少女から大人へと成熟しつつある女体の魅力を示している。

指先で突つくとぷるんと押し返してきそうな張りのある柔肌と、なよやかなカーブで形作られた清純さと色香を併せ持った処女の肢体は、抱きしめてその弾力を肌触りを全身で味わってみたいという欲望を沸き立たせるようだった。

服に隠れた部分の肌は抜けるように白く、もじもじとよじりあわされる太股と下腹が合わさる三角形には対照的に黒い恥毛の茂みがその奥の肉の割れ目を覆い隠している。

瑞々しくも淫靡な裸身を晒しているのが、知的な眼鏡の美女だというのがいつそう陵辱者たちの興奮を煽り立てていた。艶やかな黒髪や細い鼻筋にはすでに濃厚な精液が浴びせられているのだが、ややもするとふとその強い臭いにひるんだような表情が兆すのにも彼女の清純さが現れている。

多かれ少なかれ歪んだ性癖を持ったその場の男たちにとっては、すぐにも組み敷いて泣き声を上げさせてやりたいと思わせるような、そんな嗜虐心をそそる真那美の身体であり、容姿だった。

(な、何よ!? みんな、まるでエサに食いつく動物みたいな目で……)

「床に這ってケツ上げろ。後ろからブチ抜いてやるよ」

普段ナミに向けられるものとは違いすぎる視線に戸惑う真那美の様子を気にも留めず、

タトウの男は相変わらずびび割れたような耳障りな声で淡々と命令を続ける。気圧されたように、真那美は再び床に膝を着き、さらに両手について男にむっちりと盛り上がったヒップを向けた。

下を向いたことでおさら大きく見え、四つん這いの動きに合わせてゆさゆさと揺れる真っ白い乳房を、男たちは血走った目で食い入るように見つめている。

「ふーん？ あたしみたいな子のお尻がいいの？ なーんだあ。あんたも、結局……」
精一杯軽口を叩いてみせようとした真那美だったが、くびれたウエストをがっしりと掴まれて動けなくなると、その言葉も途中で続かなくなってしまう。

同時に、敏感な粘膜の入り口に火傷しそうなほど熱くて硬いものが触れるのを感じた。

「……ひっ!!」

「クククッ！ 夢に溺れたまま、名前も知らない男相手に処女膜を破られちまいなっ！」
初めて男が感情をむき出しにした声で低く吠える。反射的に身をよじって逃げようとする真那美の抵抗をもととせず、灼熱の剛棒が初めて男を受け入れる処女の肉壁をミチミチと押し広げながら突き込まれてきた。

「……かつ……くはあっ……!」

大きく見開いた瞳からぼろぼろと涙をこぼしながら、真那美は苦鳴の喘ぎ声を吐き出す。下腹いっぱい熱した石炭の固まりを詰め込まれているような苦痛が、純真な女子大生を

責め苛んでいた。

（なんでっ？　なんでこんなに痛いのか？　いつもとは……全然違う！　お、お腹……破られちゃうっ！　奥に当たってるううっ！）

これまで仮想空間で相手をした男たちの中には、ペニスをもっと大きなサイズに設定している者などいくらでもいた。それでも、ナミの小さな身体でさえこんな苦しみを、自分の中を他人に征服される圧倒的な感覚を与えられたことはなかった。

「おおっ……！　ギチギチに締まって、ビクビク震えてやがる。これだから、初モノに突っ込むのは止められねえっ！」

タトウの男は真那美の白く柔らかい尻肉を鷲掴みにしたまま腰を引く。湯気を上げそうなほどたぎり立った肉槍が、赤く染まって媚粘膜の間からずると半分ほど現れた。

「そら！　そらそらそらあっ！」

そのまま男は、すすり泣く処女の苦痛などまったく気にかけない激しい勢いで腰を振り始める。ぷっくりした肉の唇の間からピンク色の肉襷が引き出されてしまうほどの大きなグラインドに、真那美の細い身体は嵐の中の小舟のように翻弄された。

「あっ……はあっ！　くふうんっ!!　はおうんっ！」

パンパンパン、とお尻と男の腰がぶつかる音が響くと同時に、胎内では狭い肉壺の最奥をぐすぐすと凶悪な亀頭で突き上げられる。その度に、身体を支える両腕の間では形を変

えた二つの肉房が千切れてしまいそうなほどにぶるんぶるんと大きく前後に揺れた。

「真那美ちゃんのおっぱい、すっげえな！ 牛かよ！」

苦痛に喘ぐ小さな顔など気にもとめず、男たちはその淫らだがどこか滑稽な姿をゲラゲラと笑い飛ばした。

屈辱に新たな涙を滲ませる真那美の耳に、その時ひたすら肉竿で彼女の柔らかい膣肉の感触を貪り続けていた男の不気味な声が届いてくる。

「……おいつ！ 出すぞっ！ しっかり締めとけっ！」

膣内射精されても妊娠しない、だから避妊なども必要ない。当然のことながら、それがバーチャルセックスの常識だった。

（でも、今日は……。熱くて固いのが、私の中でまた大きくなってるっ!! こ、これ、いつもと違う！ 怖い……。膣内で射精されるのが怖いよおっ！）

男の声には、真那美にそう思わせるだけの滴るような悪意が込められていた。

「そらあっ!!」

ドプウツ！

「ひいあああっ！」

絶頂の瞬間、タトゥーの男はその瘦せた身体からは想像もできないほどの大量の濁液を迸らせた。最初の一射で真那美の膣内をいっぱい満たしてしまうと、続けて二度、三度

と奥まで捻じ込んだ剛直を脈動させてその奥の子宮にまで執拗に子種汁を流し込む。

妊娠はしない、と思ひ込んでいても、その執念めいた絶頂に真那美はそら恐ろしいものを感じずにはいられなかつた。

ドクツ！ ビユ……ピユクツ……！

「どうだよ、マ〇コにたつぷり注がれた感想は？ ひいひい鳴いてたが、そんなに良かったのか？」

最後の一滴まで搾り出してから、まだ硬さを失っていないペニスを真那美の中から抜き出すと、男は嘲るように彼女の背中に言葉を投げた。

「……バ、バカ言わないでよ。奥なんか突かれたって、痛いだけなんだから。あんなの、ただの独りよがりじゃない」

お尻を高く突き上げたまま、ぐったりと床に顔をうつ伏せていた真那美だったが、かうじて頭を上げて反論することはできた。

「ケツ、ふざけんなよ？ 小悪魔気取りの淫乱が。じゃあ、これは一体なんなんだよ」
不気味な男は、無造作に片手を伸ばすと艶やかな黒髪を掴んでぐつと引き上げた。

「い、痛いっ！ 止めてよおっ！」

突然の暴力に、膝立ちで身体を支えながら真那美は叫ぶ。周囲を囲んでいた男たちも一瞬ぎよつとしたように男の顔を見つめたが、しかしすぐに別のものに視線を奪われた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>